

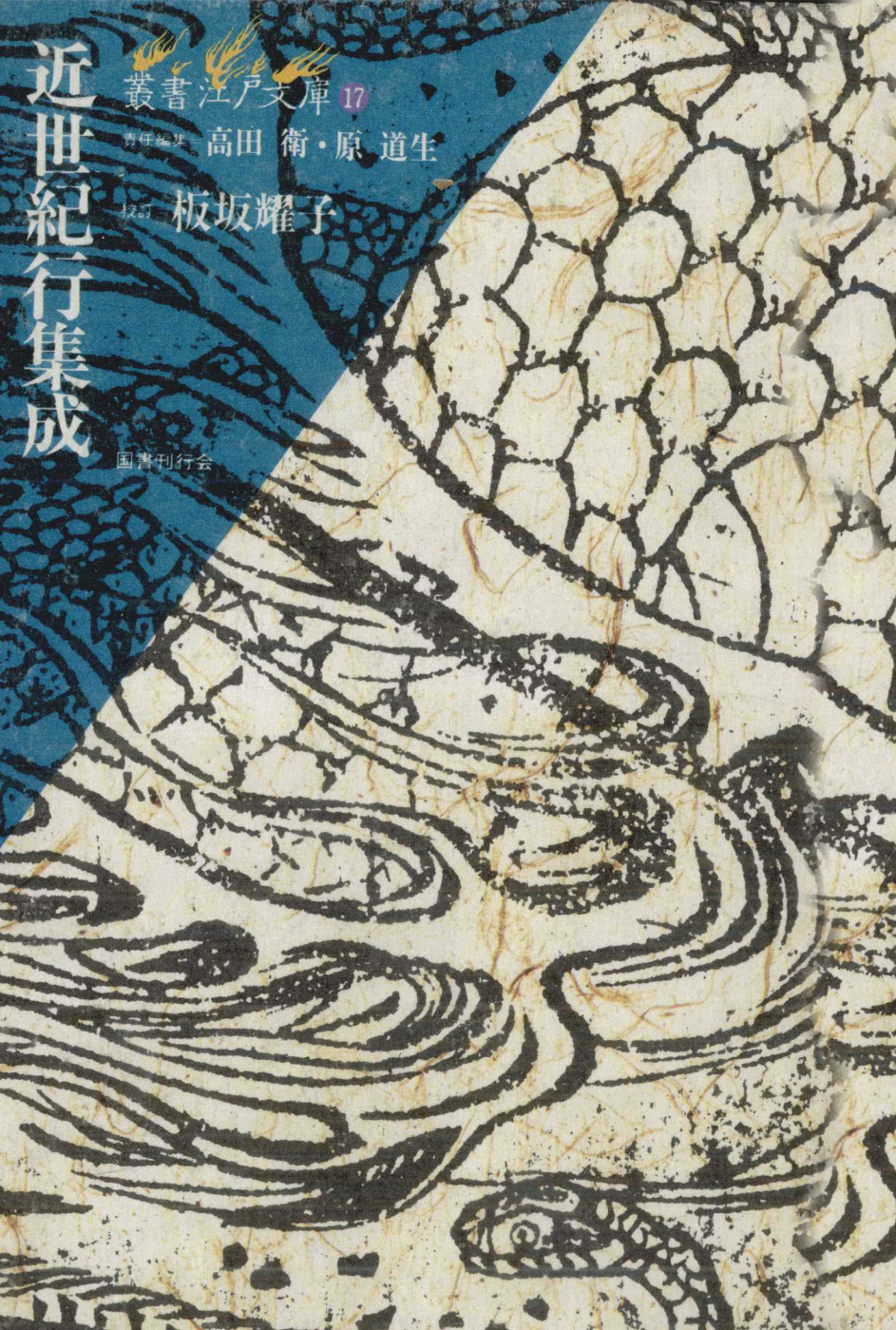
近世紀行集成

叢書 江戸文庫 17

責任編集 高田 衛・原 道生

校訂 板坂耀子

国書刊行会



近世紀行集成

叢書江戸文庫 17

古川 高田 衛・原 道生

板坂耀子

国書刊行会

近世紀行集成

叢書江戸文庫17 責任編集—高田衛十原道生

一九九一年二月二十日 初版発行

校訂者 板坂耀子

発行者 割田剛雄

発行所 株式会社国書刊行会

東京都豊島区巣鴨三十五—一八

電話〇三(三九二七)八二八七 振替東京五—六五二〇九

印刷 セイユウ写真印刷株式会社

製本 大日製本印刷株式会社

装釘 藤林省三

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-336-03006-5

目次

壬申紀行	5
本朝奇跡談	49
未曾有記	91
続未曾有記	171
筑紫道草	271
花見の日記	377
解題——板坂耀子	425

凡例

一、本書に収録した作品は、貝原益軒「壬申紀行」、植村政勝「本朝奇跡談」、遠山景晋「未曾有記」「続未曾有記」、林英存「筑紫道草」、津村正恭「花見の日記」の六編である。底本については次の通りである。「壬申紀行」は宮内庁書陵部蔵「扶桑残玉集」所収の一本を用い、金沢市立図書館蔵の写本一冊と、貝原家蔵の一本をも参照した。「本朝奇跡談」は慶応大学蔵の板本四冊を用い、他に東京博物館蔵本を参照した。「未曾有記」及び「続未曾有記」は内閣文庫蔵（一七七一―一三八）の写本十冊本の第一―二冊及び第三―五冊を用いた。ただし、本書は多くの異本があり（拙稿「遠山景晋『未曾有記』について」、『語文研究』六〇号所収）、かなり大きな異同も存するため、別系統とみられる岩瀬文庫四冊本により補充を行い、その部分は（一）で示した。「筑紫道草」は三原市立図書館蔵の写本四冊を用いた。「花見の日記」は国立国会図書館蔵の写本一冊を用いた。

一、読者に親しみやすい本文ということを配慮し、表記などについては次のようにした。

1、漢字は、旧字体を新字体に、異体字は通行字体に改めた。

2、仮名づかいは原文のままとした。

3、会話その他に適宜「」を施した。

4、振仮名は、読みにくい箇所には新たに付した。

5、句読点を施し、改行を行った。

6、適宜に段落を設け、小見出しを付した。ただし「筑紫道草」には本来の小見出しもあるため、（）を付して区別した。

7、異本により補った部分には（）を付した。

8、虫喰などで解読不可能な部分は□□で示した。

9、明らかな誤りと思われる箇所については、これを訂正した。

10、置字は、原則として、二字以上のものはく、漢字一字は々、平仮名一字はゝを用いた。

11、原本の挿絵はすべて該当部分に挿入した。

一、本巻収録の作品の中には人権に関わる用語の使用されているものがある。本叢書の資料的な性格を考慮て原本どおりに翻刻したが、読者各位には人権問題の正しい理解の上に立って本書を活用して下さるようお願いしたい。

壬申紀行

じんしんきこう

壬申紀行

貝原益軒

(船旅)

ひととなり性僻みて閑寂にふけるはわが本意なれど、いかなるちなみにや、わかき時より年毎に旅の空にうかれ出て東往西還の客となりてやむことなきも、又是わが命遇のもとより定れるにや。

ことし元禄五年、わが犬馬の年六十三歳。卯月二十七日、筑前国荒津の浜より船出して、まづ今津に至る。此所は古へもろこし舟のつける津にて、からやまとのふみにのせし処なり。船の中よりのぞめば遠近の青山めぐりつらなり、緑水に相映じ雲かすみはれくもりて朝夕の変態もいと興あるながめなり。翌日、能古の浦、也良の崎を過て大洋にこぎ出しかば浪あらく舟たゞよひて、わが衰残のちからよはき身は目くるめきむねさはぎて、いとたえがたし。されど風順なれば舟のゆくこととぶがごとくにして早く赤間が関を過て、あけの日はすでに周防国竈門の関にいたりぬ。今俗には上の関といふ赤間が、関を下の関といふに對せり一夜一日のあいだに六十里をはせゆくこと、まことに造化のしわざすみやかなるかな。猶日々に日和よく、をひ風ふきて、五月朔日播磨国室の湊につきぬ。

(書写山参詣)

われ夙志ありて書写山にのぼらんために先室^{まへむろ}にあがりてやどり、あくる二日、室より籃輿に乘て陸行する事五里、姫路にいたり宿す。室よりすぐに書写山にいたればすこしちかけれど、かねてやどりをさだめ、もてる調度なども主に託しをかんためなり。

三日の朝つとめて書写に赴く。姫路より東坂本迄五十町あり。坂本は東西両村あり、其間少隔れり。是書写山へのぼるふもとなり。東西坂本に各山王権現有。是ひゑの山になぞらへたるなり。坂をのぼりゆけば山王の惣門まで十八町あり。其坂けはしからず。坂の半より見れば東北の方に小塩山見ゆ。これ赤松氏の城跡なり。

惣門より本院へ三町、奥院へ十町ばかりあり。まづ金仙院と云僧舎に入て、しばしいこひ本院にゆく。如意輪観音あり。是此山の本堂なり。大なる仏殿なり。七間に九間ありて一間毎に八尺なり。前に橋あり。右の方に鹽水をたゝへたる大なる石あり。其内よりいさぎよき水わき出て、参詣の人鹽洗す。其かたはらに十三所順礼の人、丹後の成相にゆく道あり。此所の観音堂には高き石階ありてのぼる。堂は南面なり。高岸の上に有て、ひきゝにのぞむ。高欄によりかゝりて遠くのぞめば其景よし。播磨洋、眼下に見ゆ。此所は西国三十三所順礼観音の其一なり。性空上人の弟子安鎮、此本尊の像を作れり。長一尺五寸。勅封なるゆへ開帳はなし。本堂の内、観音の下にも清冽なる水あり。香水と云。戸を開きてくむ。後醍醐の帝も此水を汲給ふよし、書写の記にしるせり。

観音堂を下りて奥院の方にゆけば、其間に三^{みつ}の堂とてあり。南なるを講堂と云。六間に七間あり。一間毎

に各九尺尺寸あり。二階有、いと高し。額あり。書写山円教寺とかけり。是朝鮮の西川が筆なり。西なるを食堂と云。四間に十五間、間毎に各八尺五寸あり。いと長し。南にあるを常行堂と云。五間に四間。外に二間に十一間の中門、車寄あり。此三堂は後醍醐天皇の御建立にて、今も其時のまゝなりと云。此外諸堂多し。一切経蔵もあり。又、白山権現弁才天の社あり。其外にも神社あり。

奥院は西にあり。こゝに性空上人の木像を安置せる堂、五間に六間あり。甚美麗をきはむ。内厨、常に開かざれど、主とせし金仙院より僧をひとり遣はして開かしむ。堂の前、わが右の方に、乙護法若護法の社二区あり。此山の守護神なり。乙若の二童は性空につかへし神童なるよし、元亨釈書にしるせり。是性空に筑前国背振山より、こゝに随仕せるよしいへり。

書写山の此寺をすべて円教寺と名づく。村上天皇康保三年、性空上人基を開き草創せるよし、書写山の記にしるせり。今年に至るまで七百二十三年の星霜を経たり。性空はじめは日向の霧嶋にあり、中比は筑前背振山にすみ、後に此所に來れるよし、古きふみに見へたり。此山、上代は素盞の杣と云。素盞烏尊、出雲に行給ふ時、此峯に宿し給ふゆへ名づけたり。性空登山より後、書写山と改む。

此地、飾磨郡なり。後代、東西両郡にわかれて飾西郡に属す。性空上人の時、華山法皇再此山に御幸し給ひ、性空に對し給ふ。其後、後白川法皇こゝに御幸し給ひ、一七日こもらせ給ふ。後醍醐天皇も隱岐国より歸らせ給ふ時、此所に御幸し給ふ。性空より後は女人潔戒の地となり、婦女の登山をゆるさず。又守護不入の所なり。

山中林木甚しげり、こと処よりうるはし。麓にて遠く見しより山上はひろくして、僧徒のすみか、ゆたけくきれいなり。谷おほく宅ヤドロふかく境地しづかにして、各其区処をなせり。われ所々の名山を多く見侍りしに、高野山は山高く谷ふかけれど、市塵ながく山中繁榮にして幽寂ならず熱鬧の地なり。比叡山はことなる靈境なれど、今も富貴の相あり。醍醐山は閑寂の勝地なれど、山上せばくしてゆたかならず。大和の語山カタラハも又しかり。此山は閑寂にて熱鬧ならず、いとすぐれたる佳境なり。今も山僧、性空の法式にしたがひ守りて、人をむさぼらず大名高家にへつらはず、人のまうでくるにまかせて外に求めず、いとさうくし。人にもとめへつらへば、ことしげく、いとまなくして、学問法義にうとくなるよしにて、かくしづかに身をもてはむべなり。是こそ家を出し輩のほいなるべけれ。性空は浮屠氏の内にて真の徳ある人なるべし。今、山僧の其法式にしたがひてそむかざる、是、性空の法徳の余なり。陳眉公が、僧は要真ムナシコトヲ、不要シヤムコトヲ高コトヲといへる、実も、とぞ思ふ。僧の高ふりておごれるは必真なし。今、山僧、人をむさぼらざれど、わづかなる寺産を以て各其処を得たり。寺領東坂本にて八百三十三石つけり。公より御朱印を賜る。山のめぐり三里は此山に属せり。わたりは一里ばかりあり。只竹木をうる事は昔より禁止す。其故林木しげりうるはし。

山中僧舎のある所四谷あり。東谷西谷北谷中谷なり。奥の院の下なるは西谷なり。四谷にある所の僧舎、凡六十坊、其内衆徒三十坊、座方三十坊あり。座方は衆徒より貧賤なり。

花山法皇、長保四年御幸し給ひし時、御供に候ひし延源阿闍梨に性空のかたちをうつさしめ、還幸の後、采女正巨勢広貴に勅して真影を絵かゝしめ給ひ、具平親王におほせて、その行状の文章を作らしめ、行成大

納言是を淨写せらる、伝へて今に此寺にあり。筆のあと鮮明にて、きはめてうるはし。性空は寿九十八歳、こゝにて遷化せらる。此山にすめること四十二年と聞ゆ。

凡此寺にて一老を長吏とす。衆徒三十人の内より年老のつゐでにしたがひて是に任ず。古来、長吏の名ありて職掌はなき故に、いたづかはしからず。山中の庶務は役者三人有て是をつかさどる。役者も又、定れる寺なし。才学によりて任ず。

此山むかしより名ある靈境にて、天子より士庶まで、こゝにまうでくる人おほかり。和泉式部が、くらきよりくらき道にぞとよみしも、此所にての事なり。山中大竹おほし。主の僧金仙院、たかなのあつものをまうく。此山は珍羞まれにして今時は寺ごとに此品味のまうけのみおほきよし聞ゆ。渭川千畝在^ニ胸中^ニと東坡が作りし事もおもひ出られて、中々おかしき戯ごと也。山上雪ふかゝらずといへども寒月は甚さむし。され共新多ければ寒をふせぎやすし。夏は蚊といふ虫まれなり。山高く里遠くして清淨の地なり。韓文公が詩に身在^ニ仙宮^ニ第幾重^ニと吟ぜしもかゝる所にや。われもとより閑淡をこのめば山をくだるに名残おしみて、程先生の不^ニ是^ニ吾儒本^ニ經濟^ニ等閑争^ニ肯出^ニ山来^ニといへりしも、実、さる事におもひ侍る。山をくだり暮にせまりて姫路につく。

(伊和明神の勲八等)

三日。雨ふる。姫路の町の内なる惣社大明神にまうづ。此神は伊和大明神と称す。素盞烏尊の御子、大己

貴尊にて、白山権現と同じ神のよし、峯相記に見へたり。延喜式に、明石赤穂両郡に伊和都比売神社あり。宍粟郡に伊和座大名持御魂神社あり。姫路は飾磨郡なり。此神、延喜式にのせず。式外の神なり。

此神は正一位勲八等なり。社の額には軍八頭とかけり。勲八等と云事、もろこしより伝はり日本にて朝廷に用ひさせ給ふ、故ある事なり。殊に神位におくり給ふ。此神の事、又別に俗説に云伝へたるひがくしき説あり。其説にいはく、此神は神功皇后の新羅を征し給ひし時にしたがひし神なり。新羅にて八人の敵の頭をとりて軍功ありし故、軍八頭と称す。是、勲八等と云事をばしらで附会せるなり。勲八等といへるは神位のいかめしき規模なるに、それをばむかしより虚説を称すること歎べし。神社は壯麗なり。

(曾根の松)

是より加古川に行に、わぎと大道をばゆかこみちにかゝり曾根の天神の社にいたり、曾根の松とて名を得し老松のあやしくことなるを見る。木の本より其幹まがりわだかまりて高さ三間あり。其枝ひとつ、東に八間、其枝また南北にはひひろごりて扶疎たる事五六間なり。又本木より西へも四間ばかりひろごれり。凡枝のしげれる事、東西十二間あり。枝の下には、つか柱を所々に立たり。かゝる奇異なる松は、いまだ見も聞もし侍らず。里人のかたり伝へしは、むかし菅丞相左遷の時、此所を通り給ひしに、松の枝を折て地にさし給へりしが、生長せし松なりと云。

(石の宝殿)

是よりまたなはてを行、(マヤ) 小さな山を越て石の宝殿と云所を見る。其前にすこしばかりなる坂ありてのぼる。高門あり。其さきに左右社あり。中に浮閣ありて両社につゞき、両社の間の閣下を通りて石の宝殿にいたる。

石宝殿は大石の方三間半なるあり。四方上下皆同じ大きなり。其かたちは、たとへばすぐろくの賽のごとく、けたなり。石のかたちは、あめつちのひらけし時よりありて、後に人力をもて、わざとけづりなせるやうにみゆ。石のうしろのかたはらには、はとむねのつき出たるがごとくなる所ありて、あづまやのむねを横になせるやうに見ゆ。是又けづりなせるなり。左右とうしろは山の岸にちかくて、其間各二間ばかり隔れり。石の下はめぐりを少そぎて下に水あり。四方の外面に横二尺ばかりに少ゑりくぼめる所有て、上下に通ぜり。かたはらの山に登りて見れば、石の上も平にして松樹三株生たり。是、万葉の歌によめる静窟シヅクイハヤなりと云。但、岩屋とは見へず、いぶかし。万葉集第三卷、生石村主真人歌一首、おほなむちすくなひこのいましけんしづのいはやは幾代へぬらん。此石はいとあやしきことなるもの也。

右にいへる石の宝殿の前なる両社、北は生石マシシコ子明神、南は高御位明神ミタカミなり。此両社は陰陽二神にて夫婦のごとく、高御位は男神、生石マシシコ子は女神なるよし、峯相記にかけり。万葉の歌をもつてすれば、両神は大己貴、少彦名なるべし。此北に生石マシシコ子村あり。此社も其村の境内に有。

書写山の南に広峯とて高き山あり。山上に吉備公の立給へる祇園の社あり。京都の祇園は後にこゝよりうつせりと云。此祇園の社には僧坊なくして社人多し。其東に増位山あり。薬師堂あり。行基はじめて開基せり。僧坊あり。其東に法華山あり。観音あり。三十三所順礼観音の内なり。印南イナミの郡なり。是は山上にはあらず。谷中のひきゝ所にあり。此寺は孝徳天皇の御時、法道上人創立す。書写、広峯、増位、法華山、いづれも諸人のおほく参詣する所なり。皆、姫路と加古川の間の北の方にありてつらなれり。姫路よりすぐに加古川にゆけば四里あり。けふは曾根より石の宝殿にめぐり行しかば、五里ばかりも有なん。

(大坂到着)

加古川を舟にてわたり、加古の駅ムヤにいたり印南野の南をすぐ。此野は其広さ、方五六里もありなん。左の方に半里ばかりゆけば、野中の清水とて古歌によめる名所あり。雨ふり道なやみなんもいたつかはしければ、見まくほしけれどゆかず。今宵明石の浦にやどる。風雨甚し。故里に昔つかへし浪客こゝに有しが、翌朝我を招き餐をまうく。四日、午時に兵庫にいたる。きのふの夜、浪風あらくして、わが乗来りし船のあやうかりし事をきゝ、水行せばからきめを見るべきに、陸行せしは幸甚なりや。五日、けふは端午なり。あるじ、例の事ども、かたばかりにことぶきす。晚に兵庫より船にのり、翌の日、難波の港につきぬ。七日の朝、船よりあがり大坂の客舎にとゞまる。

(千塚の岩八)

九日。此たび大和の方へゆかんとて、大坂を出、平野にいたり、河内国久宝寺、八尾をすぎ、生駒山の南の麓、教興寺に至る。

教興寺は大なる律院なり。是より北の方、郡川村に至る。郡川の北より、高安郡服部川村と云所の間に、千塚とてふるき塚穴おほき所を問ふに、此山の麓にありと云。のぼりゆけば、やがて塚穴多し。其数あげてかぞへがたし。さてこそ千塚とは名付けめ。大和国山辺郡二階堂村の辺にも千塚とて岩穴多し。かうやうのふるき穴塚はいづれの国にもおほけれど、かく一所に多きはいまだ見ず。

是いかなる穴にや、とうたがふ人あり。上古に火の雨風など云事有し時、こしらへたるなど世俗にはいふ。又、乱世に盜賊をさけし所と云。或はいにしへの死人を葬りし所なるべしと云者あり。

皆ひがごとなり。易に、上古には穴居而野処といへり。上代いまだ家居なき時に、おほくの人力をもちひて大石をあつめ、つきいとなみて人のすみかとせしなり。かくのごとく一所に石窟多きは、境地よくして人のあつまり住しなるべし。其多きうちに、ほりくづして穴はなくなりたるも多し。それは村民の、石を用ひんとてほり取たるなるべし。およそかゝる石窟、諸州にあるは、皆、田はたけにもならざる所、僻地なり。人里に近きは、ほりくづして石を取、圃ハタケとせしにや。上古、穴にすみし時のわびしきをおもひやりて、今のやづくり心やすく身のゆたかなるをたのしむべし。家居に無用のきよらをなしておごるべからず。およそ物